

紛争後のカンボジア社会におけるキリスト教¹⁾

宇井 志緒利
UI Shiori

はじめに

近年カンボジアでは、キリスト教徒が増えているといわれる。社会主義から移行した他のアジア諸国でも、福音派プロテスタントを中心に信徒数が増加している例がみられる²⁾。他国とは異なるカンボジアに特徴的な要因があるとすれば、それは何だろうか。なぜ人々は広く受け入れられてきた上座部仏教ではなく、キリスト教に入信するのであろうか。

キリスト教界に関するまとまった統計や記録が極端に限られているカンボジアで、筆者は、弾圧の時代を生き抜き信仰を守り続けてきた現地の友人と共に、地方の小規模教会を中心に訪問し答えを探っている。虐殺や内戦を経験したキリスト者が高齢化していく中で、当事者による情報収集、分析と記録化を後押しすることも、テーマの解明と共に当調査研究の目的の一つと位置付けている。

まずカンボジアの現代史を振り返り、同国におけるキリスト教の歴史を概観する。続いて、主にプロテスタント教会の現状とキリスト教受容の社会的要因の特徴について考察する。1989年からNGOワーカーとしてカンボジアを訪問してきた筆者の参与観察、そして現地関係者との会話や聞き取りまた文献研究をもとに、これまでに見出したことを中間報告する³⁾。

1. カンボジアの社会背景・現代史

(1) 内戦・紛争の歴史と影響

カンボジアは世界遺産のアンコール遺跡群のある国として、近年日本の人々からも親しまれている。日本の国土の半分に約 1600 万人が暮らすこの国の現代史は、内戦・紛争の連続であった。

1953 年にフランス植民地支配から独立するも、間もなくして隣国ベトナム戦争の影響を受けて東西冷戦に巻き込まれ、内戦に突入した。親米派の將軍によるクーデター、ベトナムの共産ゲリラが侵入しているという名目による米軍の空爆、その中で地方の農民貧困層に支持を広げていた共産主義グループ、クメール・ルージュによる武力闘争が広がった。1975 年にその指導者ポル・ポトが政権をとった 3 年 8 か月に及ぶ時代には、少なくとも国民の 5 人に 1 人が処刑、過酷な労働と飢えや病気によって命を落としたといわれている。ポル・ポト政権崩壊後 1980 年代前半には、タイ国境沿いに多数の難民が出た。ベトナム軍の支援を受けてポル・ポト政権を崩壊させた新しい政権は、ベトナムの傀儡政権だと見なされ国連から認められなかった。一方、タイ国境沿いを拠点にしていた 3 派（王党派、親米派、ポル・ポト派）が連合を組み、国連の議席を持ちながら、大国の支援を受けて反政府武力闘争を続けた。

冷戦の終わりとともに 1991 年に和平協定が結ばれ、政権を争った 4 派が参加して総選挙を行うべく、翌年国連平和維持活動（PKO）が入った。この時、日本の自衛隊が初めて海外派遣された。途中、ポル・ポト派は選挙への参加を拒否してゲリラ活動を続け、ポル・ポト派ぬきで総選挙が行われた。選挙結果に基づき、王党派とフン・セン派との連立政権で国が再スタートしたが、2 人の首相の軍が武力衝突を起こし、首都のプノンペンにまでその戦禍が及んだ。始まって間もない西側の援助も停滞した。リーダーのポル・ポトが 1998 年死亡したのをきっかけに、残党兵士がすべて投降し、実質武力闘争が終結したのは 1999 年だった。

急速な原始共産社会の実現を試みたポル・ポト政権下では、既存の市場、

学校、病院、宗教施設も廃止され、保健医療従事者や教員、宗教指導者など、知識層・技術者の多くが失われた。また、強制移住や集団結婚・親子別居生活、子ども隊を作るなどして、密告制度が徹底され、親族・夫婦・親子の関係さえも破壊された。そのトラウマは、この時代を経験した年代の人たちの中に、今も残っている。

ポル・ポト政権崩壊直後、カンボジア国内の人々は絶望的な状況にあったが、政治的な理由で西側からの援助は受けられなかった。ほんの一握りの国際 NGO 以外は国内に入れず、援助はもっぱら難民キャンプへ流れた。限られた国の予算は、長引く内戦の軍事費に使われ、あらゆる国々から持ち込まれた地雷や米軍による空爆後の不発弾の撤去がされず、そのために復興が大幅に遅れた。保健施設や学校など基本的な設備も整わず、このポル・ポト政権後の国内の復興開発が遅れたことは、後のキリスト教の広がり的重要因素になったと考えられる。

(2) 近年の急激な社会変化と新たな課題

近年のカンボジアは年 6～8% の高い経済成長を遂げ、2015 年には一人当たりの国内総生産が 1000 ドルを超えて「最貧国」の区分から抜けた。外資投入による縫製産業は、農業や観光業とならんで主要な産業となり⁴⁾、農村から工場に多くの女性が働きに行く。首都プノンペンや観光地では、豪華なホテルやショッピングモール、カジノの建設ラッシュが続く。筆者は 1989 年からほぼ毎年カンボジアを訪問してきたが、特に 2010 年以降の変化は目まぐるしく、驚くばかりである。

経済開発優先の政策を進める現政権は、最大野党の党首を逮捕して解党させ、政府に批判的な政治家や人権活動家を弾圧し、マスコミを次々と閉鎖に追いこんだ。実行行使による土地の囲い込み・立ち退きも後を絶たない。

国内の貧富の差は拡大し、かつての農閑期の都市部への出稼ぎから、近年は農村から直接外国への長期移住労働が増えている。薬物やギャンブル依存症の若年化、多重債務なども、都市部農村部を問わず起こっている。人々の生活は多忙になり、ストレスも増している。さらに気候変動による自然災害

も頻繁化し、人々の直面する課題はより複雑になっている。

2. キリスト教徒・教会の歴史

(1) ポル・ポト政権以前のカンボジアにおけるキリスト教

カンボジアの人々の大多数は上座部仏教を信仰しており、自分たちの地域のお寺を持ち支えること、紛争後は修繕・整備することは、人々の願いであり復興の象徴であった。上座部仏教が圧倒的多数のカンボジア社会の中で、キリスト教はどんな歴史を経てきたのだろうか。

キリスト教がカンボジアに渡来したのは、日本とほぼ同時期である。カトリックは1555年にポルトガルからドミニコ会宣教師が到来し、その後1751年にパリ外国宣教会が入った。1863年から90年間フランス保護領となったが、カンボジア人の間にキリスト教（カトリック）はそれほど広がらず、信者は主に（9割が）都市部に住むベトナム人・ベトナム系、中国系住民であった。17世紀には、日本を脱出したイエズス会のキリシタンがプノンペン近郊の川べりに集住していたという記録もあるという⁵⁾。

一方、プロテスタントは1897年にイギリスの聖書協会が入り、聖書（ルカ書）のクメール語訳に着手した。1923年にはアメリカの宣教団 Christian & Missionary Alliance が入り、1925年には神学校も開いた。その後、1970年代前半の親米ロン・ノル政権下、アメリカの宣教団、キリスト教系 NGO が活発に活動し、信者が増えていった⁶⁾。

(2) ポル・ポト政権下における弾圧と公式認可への道のり

ポル・ポト政権（1975年4月～1979年1月）下では、仏教を含めすべての宗教が全面禁止となり、直前の1975年人口700万人のうち約1万人いたキリスト教徒（半分カトリック、半分プロテスタント）は多くが殺され、生き延びた者も国外に出た。政権崩壊直後には200人ほどになっていたと推定されている⁷⁾。ポル・ポト政権からの解放後、社会主義政権下では、仏教は復興が奨励され、後にイスラム教にも自由が与えられた。一方キリスト

教は「西側の宗教」とみなされ、苦難の歴史は続いた。ポル・ポト時代を生き抜いた少数の信者たちは、他の人たちに知られないようにひっそりと信仰を守り続けた。プロテスタント教会が政府から集会礼拝の認可を受けたのは、1990年になってからのことである。

そのきっかけになったのが、ポル・ポト時代前に宣教団体の若者センターで英語を学んだことがきっかけで入信した、ヨス家の三姉妹（シタン、モリー、ソクン）の父親の葬儀だった。キリスト教徒も信条を隠して仏教式の葬儀をしていた当時（1988年）、敢えて三姉妹はキリスト教式葬儀を決行した。政府からどんな厳しいお咎めがあるかわからないその時代に、どれだけ勇気の要る行動だったであろうか。一足先にプノンペン郊外の共同墓地を取り戻していたカトリック教会の協力で埋葬を行ったところ、それまで迫害を恐れてキリスト教徒であることを明かさなかった信者たちが、続々と参列した⁸⁾。

この葬儀をきっかけに、三姉妹の長女シタンさんを含む10名の指導者が集まって、委員会を立ち上げ、プロテスタント教会も政府から正式に集会・礼拝の許可を取るために動き出した。当時教育省職員だったシタンさんと宗教省大臣の妻が職場の友人だったことで、三姉妹は大臣のもとに3か月以上通い続け、どんな小さな質問にも丁寧に答えていった。政府はクリスチャンが反政府的な考えをもっているのではないかと恐れていた。政府指導者に対する考えを聞かれた時、三姉妹は即座に大臣の前で新約聖書ローマの信徒への手紙第13章を開いて読みあげた。「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。」これが決め手となり、1990年4月政府から正式認可が下りたという⁹⁾。

許されたとはいえ、プロテスタント教会はとても慎重に気を配りながら礼拝に集まっていた。政府側の情報員がついているのではとの心配もあり、日曜日に口コミで集まった人たちは声を凝らして祈っていた¹⁰⁾。

(3) 新生カンボジアにおける信仰の自由と規制

1992年には、国連暫定統治機構（UNTAC）がカンボジアに入り、タイ国境沿いで難民救援活動をしてきた国際NGOも一斉に活動拠点を国内に移し始めた。そんな中で、プロテスタント教会の合同受洗式がメコン川で行われた。老若男女が喜びに満ち溢れた合同受洗式となった。

総選挙後1993年に制定されたカンボジア憲法では第43条で、宗教の自由が書かれている。他の宗教に影響を与えない、公共の秩序と安全を脅かさない限りにおいて「信仰の自由」を認める一方で「仏教は国の宗教である」と定めている¹¹⁾。しかしその後も、引き続き多くの小規模教会は、十字架や教会の看板を掲げず、目立たないようにしていた。

約30万人の帰還難民と共にカンボジア国内に入ってきた宣教団体は実に多様で、様々な問題も起こった。例えば、1994年にアメリカの宣教師が来て、プノンペンにあるスタジアムで大規模な集会を計画した。シタン牧師をはじめ何人かの地元教会リーダーはやめてほしいと頼んだが、強硬に開催されたという。「見えるようになる、歩けるようになる」など奇跡を約束したが、起こらなかった。それによって、政府や民衆からの不信をかい、地方の教会が「嘘つき宗教」と人びとから石をなげられるという事件も起こっている¹²⁾。また、一部の宣教グループによる改宗を目的にした、現金、食料や物の配布、強引な戸別訪問が目にとり、それらを禁ずる政府の指針が、2003年と2007年に出されている¹³⁾。

急に様々な外国の宣教団体から資金が提供されるようになり、どこから誰が資金を受けるのかなどで揉めて、緩やかにまとまっていたカンボジアのプロテスタント教会は分裂していったという。

3. カンボジアのキリスト教界の現状

(1) キリスト教徒数と教会数

このような歴史を経たこの国のキリスト教界の今を概観する。カンボジア政府宗教省によれば、2015年現在の宗教別人口比は、仏教徒が95%、イス

ラム教徒が2.44%、キリスト教徒は0.65%とされている¹⁴⁾。キリスト教徒の数は、宗教省に登録された教会やネットワークからの報告をもとに推計しており、必ずしも受洗者の数ではなく、日曜礼拝の参加者平均数が報告されているようである。未登録の教会や小規模の家庭教会なども増えており、実際の数はもっと多いと思われる。

プロテスタント系教会の最大ネットワーク Evangelical Fellowship of Cambodia (EFC) の教会地図プロジェクト Mission Kampuchea 2021 (MK 21) は、2012年時点のプロテスタント信徒数は人口の1.32%、2017年には1.28%と推定している¹⁵⁾。国内外の諸団体・機関による統計推定では、1~4%と幅広い¹⁶⁾。キリスト教徒の数は、これも各所の情報が多様であるが、United Bible Societies は、カトリックも含めたカンボジアのキリスト教徒数は1990年代の5000人から2017年には40万人になったと推定している¹⁷⁾。これは人口比からすると2.5%に相当する。各地の様子をよく知る複数の教会指導者の話からしても、現在のキリスト教徒の割合は概ね3%で、その内約1割がカトリック、と考えるのが妥当であると筆者は考える。いずれにしても、キリスト教徒は少数者である。

さらにMK21の州別キリスト教徒人口比率の変化(2012年→2017年)をみると、都市部(首都プノンペン:2.636%→2.27%、シアヌークビル:2.636%→2.27%)とやや減少している。ベトナム国境に近い山岳少数民族の居住地域(モンドルキリ州:2.393%→4.82%)では他よりもキリスト教徒の人口比率が高く、更に増えている。一方、最後まで武力紛争が続いていた北西部タイ国境沿いの州、例えばオッドーミエンチェイ州では、2012年では0.379%と他地域と比べてかなり低かったが、2017年には2.08%と急増している¹⁸⁾。明確な最新データは得られていないが、筆者および現地関係者による「近年首都プノンペン周辺では入信者の数はそれほど増えず、小規模の家庭教会では信徒が減る傾向にある」と「近年元戦闘地域でプロテスタント教会と信徒が増えている」という観察は当たっているといえる¹⁹⁾。プロテスタント教会数については、上述のMK21が確認しているだけでも、2012年で2713か所が2017年では3204か所、と5年間で約500か所増え

ている²⁰⁾。そしてその多くは遠隔地域にできた教会である。

現在、カンボジアのプロテスタント教会を束ねる1つの協議会はない。教派系列や外部ドナー別のネットワークが複数存在しており、ネットワーク間の連携協力があるとはいいがたい。前述のとおり、1990年にはまとまっていたプロテスタント教会は、その後各国からの援助支援の急増に伴って、支援側の囲い込み競争に巻き込まれて分裂していった。一部の宣教団体は、建物、牧師の給与補てん、研修機会など支援の条件として、教会とリーダーを自らの教派や系列下に置いて管理した。筆者が訪問したいくつかの教会も、教会を開いた当初は特定教派に属していたが、その後独立した教会に変更している。他の支援者との連絡や訪問者の受け入れにも、本部からの許可が要求されることもあったという。財政的には困難でも、自分たちの教会として独立していること、自由であることを誇りにしている。

(2) 多様な教会の姿

教会の規模や形態、信徒の属性は多様である。家庭教会の多くでは、牧師やリーダーの家の居間や高床式の家屋の床下を礼拝や集会所として使っている。一方、首都には宿泊施設も備えた大きな建物を持つ教会も複数あり、プロ顔負けの音楽バンドがあったり、英語の同時通訳付きの礼拝を一日3回行う教会もある。大規模な教会の多くは外国の宣教団が拠点を開いたり、難民として欧米諸国に渡ったカンボジア人が帰国して教会を設立している。音楽設備が整った教会では、多くの若者が集っている。一方、子どもたちばかりの教会もあり、寮を兼ねた子ども施設や外国宣教団による就学・生活支援を受けている子どもたちが主な礼拝出席者であることも稀ではない。

一部地方では、近隣の小規模教会の自主的なネットワークも形成されており、情報交換や合同研修会、クリスマスのイベントや冠婚葬祭時の協力、共同墓地の確保など、少数派として存続するために助け合っている。

(3) 教会リーダー対象調査結果からみられる傾向と課題

プロテスタント教会の現状や傾向に関して、アメリカに基盤を置くある宣

教団が、興味深い調査報告を出している。全24州のうちの11州計168人のプロテスタント教会リーダー（28教派の教会、38の独立教会）に行ったインタビュー調査で、2012年に実施された²¹⁾。最新の情報ではないが、現状把握の参考として一部を紹介する。ここで言う「教会リーダー」とは、必ずしも資格を持った「牧師」に限らず、広く信徒のグループをまとめ導く人のことを指し、その村で初めての信徒がリーダー役を担っていることも多い。

回答したリーダーの多くは男性（70%）で、一人で複数の教会を担当（33%）している。小規模教会では、それぞれ農業や他の生業を持っており、土日に教会の仕事をする者が多い。教会専従者は少数（12%）である。聖書学校は首都を中心に地方の町にも所々あるが、通っているまたは卒業した人はまだ多くはなく（3%）、短期のセミナー（43%）や他の人の説教を聞いて参考にする（16%）、自己勉強（21%）によって研鑽している。所属教派のあるリーダーの42%が「教派の教義がよくわからない」と回答している。筆者の面談したリーダーのほとんどは教派についてそれ程気にしていないように見受けられ、支援状況に合わせて所属教派を変えるものもいた。

信徒数の変化については56%のリーダーが「増加している」と答えているが、減っている教会（22%）もある。伝道はリーダーのみ（21%）より信徒全員（69%）で担い、その方法は、家族親戚や友人など既存の関係を活かす（35%）ほか、地域戸別訪問（36%）に力を入れている。

「カンボジアの教会は、外国の資金援助に依存しすぎている」とよく言われる。しかし同報告書によると、教会の建物は外国からの資金を充てる場合が多い（89%）が、通常の運営活動資金については、外国への依存は減っている（2007年：35%→2012年：25%）ことがうかがえる。ただほとんどの教会で聖書や讃美歌などの基本的な備品が足りない状態で、自分専用の聖書を持っていないというリーダーも少なからず（10%）あった。

周囲の人々の差別や迫害については、若い人が信仰を辞める理由の44%が、親や親せきからの反対や校友からの差別によるという。仏教徒である親や周りの親戚から「親を裏切り、伝統文化に逆らっている」と非難され縁切

りされることもある。筆者の仏教を信仰する複数の親との会話からは、「子どもの選択の自由」「将来のためになるなら構わない」など、反対しない親も都市部を中心に増えてきたようである。

その点、カトリック教会は家庭内・地域内での分裂を防ぐ工夫をしている。仏教的伝統文化を尊重した建築、美術、教会礼拝堂での座り方（例えば、椅子ではなくゴザを敷いて床に座る）、儀式に使用する道具（例えば線香）など、人々になじみの深いものを使っている。親がカトリックでない子どもへの洗礼は、18歳になるまで待つ、などの配慮もなされている²²⁾。

4. カンボジアにおけるキリスト教受容の背景と要因

(1) 変化するキリスト教入信の背景と要因

カンボジアのキリスト教徒は、ほとんどが上座部仏教からの改宗者である。入信の経緯・理由は多様であり、個々人の信仰史をまとめて語ることはできない。しかし、敢えてカンボジアの歴史・社会背景の変化に注目して分析し、大きく3つの世代・特色を持った区分を試みた（表1 カンボジアのキリスト教徒入信時期と特色）。もちろん、上記3世代は明確に分けられるものではなく、その要素や時期が重なったり、地域によって時期も異なる。

第1世代（ポル・ポト時代の前後、1990年代前半までの入信者で、内戦と虐殺時代の経験者）：ポル・ポト時代前の1970年代前半のロン・ノル政権時代、アメリカのキリスト教系NGOや宣教師の英語クラスや若者向けプログラムに参加したことがきっかけで、入信した人たちである。ポル・ポト時代そしてその後の内戦時代も、アメリカのスパイ、革命の敵として処刑されないよう信仰を隠し通した。また、ポル・ポト時代後1980年代～90年代前半に入信した人たちもこの世代に当たる。兵士として戦場で生死をさまよった人たちや、タイ国境難民キャンプに逃れ、キリスト教系の救援団体を通して初めてキリスト教に触れた。

表1 カンボジアのキリスト教徒入信時期と特色（筆者作成）

世代	入信時期	入信のきっかけ	自由度、関心・ニーズ
第1世代	ボル・ポト派時代前後 ～1990年代前半 内戦と虐殺時代	欧米の宣教団・キリスト教系NGOのプログラム参加 生死の体験、難民キャンプでの救済	宗教選択の自由なし 極度の制限 生き延びた意味
第2世代	1990年代後半～ 2000年代後半 紛争後復興期	国際援助の大量流入 キリスト教系NGOの開発・教育プログラム・宣教団による活動に参加 第1世代による伝道	法律上宗教選択自由も 偏見や差別あり 生存・生活課題の解決 貧困・健康問題
第3世代	2010年頃～現在 急激な経済成長期	個別ニーズへの対応 若者リーダーシップ育成活動	宗教選択の自由度増 課題の多様化・複雑化 相互扶助の仕組み弱 新たな共同体求め

入信はしなくても、難民キャンプでまた移住した第三国でキリスト教の思想や実践に触れ、かなりの数の人々がキリスト教の親派や理解者になったことは明確である。難民支援に携わるワーカーの献身的な姿に感銘を受けた者、また欧米に移住するために改宗を申し出た者もいる。定住先で神学トレーニングを受け、宣教師として母国に戻ってくる者もあった。彼らは、海外とのパイプを活かして資金を調達し、カンボジアで活発な伝道活動をしている。

この世代に共通しているのは、親族や友人の多くが亡くなったなかで、自分が生き延びた意味を繰り返し問うていることである。この第1世代からは、強い信仰と使命感を持った多くのカリスマ的牧師や指導者が生まれ、現在も熱心に伝道活動を続けている。

第2世代（1990年代後半～2000年代の紛争後復興期の入信者）：国連主導による総選挙が実施され、難民キャンプから30万人余の難民が帰還し、それに伴って国際援助が一斉に国内に流入した時期に入信した人たちである。保健や教育など行政の基本的サービスの絶対的な不備を欧米のNGOや外国宣教団がカバーした。健康問題や貧困など様々な具体的な日々の生活課

題が祈りによって叶えられたこと、困っていた時に具体的にキリスト教系の団体やワーカーに助けられたこと、就職につながる英語やコンピューターが無料で学べることなどがきっかけとなった。加えて第1世代による熱心な伝道の影響も大きい。

第3世代（2010年代～現在の入信者）：生活状況が改善して、生存レベルの課題がある程度落ち着き、宗教選択の自由が確立してきた時期に入信した人たちを指す。急速なグローバル経済の流入による人々の生活様式の変化や、スマートフォンの普及やSNSなどコミュニケーション方法の変化、そして気候変動の影響によって、新たな課題も生まれている。多重債務や、長期の移住労働、若者の農業離れ、薬物依存症の低年齢化など。都市、農村の地域を問わず大人の移動が激しく、多忙になり、子どもの養育者・保護者の不在や高齢化（親の不在中、祖母が面倒をみているケースの急増）、そしてこれまで頼りにしていた家族・親戚や地域における相互扶助の仕組みの弱体化が起きている。そんな中で、人々は個々のニーズや気持ちに寄り添い、助け合い祈り合う、日々の生活の中で起きる苦しみや喜びを分かち合う「新しいコミュニティー」を求めているように見られる。

(2) カンボジアの社会的背景要因の特徴

キリスト教徒の増加に影響を及ぼす社会的な要因として、他国と異なるカンボジアの特徴として、次のことが挙げられるであろう。

- ポル・ポト時代という、極端な虐殺と迫害の時代があったこと。
- 多数の難民が発生し、難民キャンプで支援団体を通してキリスト教に触れる機会があったこと。
- 難民が主にキリスト教徒が多数の欧米諸国に渡り、定住先で多くが入信したこと。またその人たちが、母国・ふるさとの親族や知人への熱心な働きかけをしたこと。
- 長引いた国内への援助の遅れと、和平後の急激な援助流入の影響で、

人々の差し迫った生活ニーズに応える援助を通じたキリスト教伝道が行われたこと。

- 急速なグローバル化の波の押し寄せとともに、他の近隣諸国よりも短期間に生活環境やニーズの変化、新たな課題が起こっていること。

この他、近年の韓国からの積極的な宣教支援は、カンボジアで顕著にみられ、その影響は少なくないと思われるが、他のアジア地域でも同様の傾向はある。韓国のキリスト教界によるカンボジアへの宣教支援に特殊性があるのかどうかについては、更に情報収集を必要とする。

(3) 元ポル・ポト派支配地域における特徴

北西部タイ国境沿いの元戦闘地域では、1990年代終わりまで政府軍とポル・ポト軍の戦いが続いていた。その地域の教会やキリスト教徒に関する情報は、教会ネットワークの中核を担う人たちの中でも限られており、包括的な現状把握は困難である。ジャーナリストが散発的に該当地域に入り、個別のインタビュー記事を書いているが、その焦点はあくまで元兵士個人の改宗ストーリーであることが多い²³⁾。長年外部との行き来が閉ざされ、復興開発が遅れたこの地域に急増している背景には、他の地域と異なる点や要因があるのではないだろうか。

2017年からこの元戦闘地域の教会やグループを訪問し、リーダーや信徒と面談した。これまでのところ、下記のような特色が示唆された。しかしながら、その事例は4例とごく少数で、更なる事例収集と検証が必要である。また個人史も含めた話は微妙で慎重を要し、詳細や心の中の思いを一度の面談だけで聞くことはできない。まずは信頼関係づくりが必須である。今後はこの地域に焦点を絞って教会訪問と情報収集をし、分析を進める計画である。

- 表1に示した、第1世代～第3世代の背景とニーズの同時進行：他地域から20年遅れて復興が始まり、基本的な社会サービスがまだ整わないうちに、急激な経済と社会変化が同時期に押し寄せた。

- 仏教からの「改宗」意識の低さ：元支配地域に住んでいた人々は「仏教からの改宗」ではなく、特定の宗教をもたない状態からキリスト教に入信する、という点である。「元ポル・ポト派の人は宗教にオープンだ」と他州から牧会に来た牧師も言っていた。もともと宗教・信仰なしのところに、積極的な宣教がキリスト教だったため、「宗教を変えた」という意識がない。
- 家族・親族からの反対の少なさ：元ポル・ポト派の兵士をしていた人たちは、出身地の家族と離れて転々と移動していたことから、親戚がそれほど周りにおらず、キリスト教への入信に大きな反対にあわないのではないかと思われる。
- 「罪」「罪人」の理解と自分の過去との意識的な照らし合わせ：元ポル・ポト兵だった教会指導者や信徒は、自らのキリスト教への入信について語る時、罪人の自分を振り返るとともに、「平等と公正」が実現されない今の状況への痛烈な批判を口にした。彼らが大切にしてきた信念は変わっていないこと、そしてそれがキリストの教えの中で新たな確信になっていることが伺えた。
- 共同体としての意識・連帯感の高さ：「このグループが支えになっている」「自分の家族のよう」と繰り返し出てきた信徒たちの声や、「この人たちは、人との関係を大切にしている」、と他州からこの地域に来て牧会を続けている牧師の意見も聞かれた。自分の家から多少遠くても、同じ教会に通い続け、長引く内戦状態で苦労を共にしてきた仲間と過ごす時間を大切にしていることがわかった。

5. おわりに

カンボジアでは、虐殺や内戦など多くの困難を乗り越えながら、国内・国際での大量の人の移動によりキリスト教が人々の間に広がってきた。また、近年元戦闘地域で元ポル・ポト派の兵士や家族の間でキリスト教が受容されているのも、カンボジアならではの現象かもしれない。

一方、近年のカンボジア社会は急激に変化しており、特に都市部における人々の悩みは我々のそれと類似している。教会においても、第1世代が築いた教会の持続性また後継者をどうするか、多忙化し複雑化する人々のニーズ、特に「お腹は満たされたが、心の中に怒りを持った」若者のニーズにどう応答するか、が優先課題として取り組まれている²⁴⁾。

カンボジアの教会の変遷や課題を追いながら、同じ時代に生きる私たち日本の教会・キリスト教徒の置かれた状況の違いの大きさと同時に、直面する課題の共通性も改めて認識した。従来の「助ける一助けられる関係」を超えて、お互いに学びあい励ましあう関係を創れるのではないか、という希望を持って今後も調査研究をすすめたい。

注

- 1) 本稿は、2019年6月1日開催の立教大学キリスト教学会大会における講演内容に執筆したものである。一部は「内戦と虐殺の歴史を経て：カンボジアの社会変化とキリスト教」、『福音と世界』2017年7月号、12-17頁に掲載された内容を引用・加筆している。
- 2) 滝澤克彦『越境する宗教：モンゴルの福音派』新泉社、2015年、20-32頁。
- 3) 本稿の中心課題に関する半構造的インタビューは、主に2016年3月～2019年3月に行った。
- 4) 初鹿野直美「2017年のカンボジア」、『アジア動向年報 2018年』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2018年、246-264頁。
- 5) 石澤良昭「カンボジアの伝統社会とキリスト教」、寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』めこん、2002年、177-194頁。
- 6) Thyu, J. K., Hoerschelmann, H, and Juergensen, A., “Cambodia.” *The Ecumenical Review* 64(2), 2012, pp. 104-124.
- 7) *Ibid.*
- 8) Maher, B., “Biography: Molly Yos.” *Honeycomb* 5(1), 2004, pp. 137-147.
- 9) 2016年8月26日、Yos Sithan氏およびYos Molly氏との面談より。
- 10) 1990年～1991年カンボジア訪問時、筆者による日曜礼拝の参与観察による。
- 11) The Constitution of the Kingdom of Cambodia, http://cambodia.ohchr.org/~cambodiaohchr/sites/default/files/Constitution_ENG.pdf (2017年5月1日閲覧)
- 12) Mang, C., “The Stones Being Thrown at Christians.” *Phnom Penh Post*, March 10,

- 1995.
- 13) Shelton, T., and Cheang, S., “State Commandment: Thou Shall Not Buy Buddhists.” *Phnom Penh Post*, July 27, 2007.
 - 14) 2016年3月4日カンボジア宗教省諸宗教局長との面談より。
 - 15) Mission Kampuchea 2021 は次のホームページを参照した。<https://cambodiachurches.org/harvest/mapping/CP/map.html?displaylang=EN&lang=sec> (2012年データ：2017年3月16日閲覧、2017年データ：2019年5月28日閲覧)
 - 16) 例えば、World Population Review Cambodia Population 2019 では約1%。アドレスは <http://worldpopulationreview.com/countries/cambodia-population/> (2019年9月12日閲覧)、Joshua Project Cambodia 2019 では3.2%と推定。<https://joshuaproject.net/countries/CB> (2019年9月12日閲覧)
 - 17) “Modern Khmer Bible at the Heart of the Revival of the Cambodian Church,” United Bible Societies, August 8, 2017. アドレスは <https://www.unitedbiblesocieties.org/modern-khmer-bible-at-the-heart-of-the-revival-of-the-cambodian-church/> (2019年5月28日閲覧)
 - 18) Mission Kampuchea 2021, *op. cit.*
 - 19) 2016年3月9日、Evangelical Fellowship of Cambodia 代表 Tep Samnang 氏、2017年1月31日、DOVE 創設者 Uon Seila 氏、2018年2月15日、Cambodia Bible Society 元代表 Arun San Nhep 氏との面談より。
 - 20) Mission Kampuchea 2021, *op. cit.*
 - 21) Hyde, S., *Portrait of the Body of Christ in Cambodia 2012 Edition: A Detailed Statistical Study of the Church in Cambodia and Its Characteristics*, Phnom Penh: Antioch Institute, 2012.
 - 22) Seng, S., “Thank God for Catholic Missionary Approach.” *Phnom Penh Post*, June 10, 2009; 2017年2月11日～2月12日、2018年2月11日のカトリック教会ミサ参与観察と関係者との面談より。
 - 23) Hoekstra, A., “Former Khmer Rouge Leader among Cambodia’s New Christians.” *La Croix International*, May 20, 2017; Ly, S. K., “The Shadow of Religions in the Peace-Making Process.” *Phnom Penh Post*, February 28, 2019; Yon, S., “Ex-Khmer Rouge Leader in Cambodia Embraces Christianity.” *Anglican Ink*, April 9, 2019.
 - 24) 2017年1月31日、若者の育成活動をする現地 NGO の DOVE 創設者 Uon Seila 氏との面談より。

参考文献

- 綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいカンボジア』弘文堂、1996年。
石澤良昭「カンボジアの伝統社会とキリスト教」、寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』めこん、2002年、177-194頁。

- 宇井志緒利「カンボジア：シェムリアップ州北部での村づくり、健康づくり」、『立教大学平和研究報告書 宗教間・文化間『対話』を通じたアジアの共存と平和』2013年、18-30頁。
- 宇井志緒利「内戦と虐殺の歴史を経て：カンボジアの社会変化とキリスト教」、『福音と世界』2017年（7月号）、12-17頁。
- 上田広美・岡田知子編『カンボジアを知るための62章』明石書店、2012年。
- 滝澤克彦『越境する宗教：モンゴルの福音派』新泉社、2015年。
- 寺田勇文編『東南アジアのキリスト教』めこん、2002年。
- 初鹿野直美「2017年のカンボジア」、『アジア動向年報 2018年』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2018年、246-264頁。
- 廣畑伸雄・福代和宏・初鹿野直美『新・カンボジア経済入門：高度経済成長とグローバル化』日本評論社、2016年。

- Cormack, D., *Killing Fields Living Fields: An Unfinished Portrait of the Cambodian Church*, Kent: OMF Publishing, 2009.
- Hoekstra, A., "Former Khmer Rouge Leader among Cambodia's New Christians." *La Croix International*, May 20, 2017.
- Hyde, S., *Portrait of the Body of Christ in Cambodia 2012 Edition: A Detailed Statistical Study of the Church in Cambodia and Its Characteristics*, Phnom Penh: Antioch Institute, 2012.
- Ly, S. K., "The Shadow of Religions in the Peace-Making Process." *Phnom Penh Post*, February 28, 2019.
- Maher, B., "Biography: Molly Yos." *Honeycomb* 5(1), 2004, pp. 137-147.
- Mahar, B. and Uon, S., *Cry of the Gecko: History of the Christian Mission in Cambodia*, Centralia, Washington: Gorham Printing, 2012.
- Mang, C., "The Stones Being Thrown at Christians." *Phnom Penh Post*, March 10, 1995.
- Meas, N., *Towards Restoring Life: Cambodian Villages* (Translated and transcribed by Joan Healy), Phnom Penh: JSRC, 1995.
- Mission Kampuchea 2021, <https://cambodiachurches.org/harvest/mapping/CP/map.html?displaylang=EN&lang=sec>
- Mysliwicz, E., *Punishing the Poor: The International Isolation of Kampuchea*, Oxford: Oxfam, 1988.
- Phan, P. C. (ed), *Christianities in Asia*, Chichester: Wiley-Blackwell, 2011.
- Ponchaud, F., *The Cathedral in the Rice Paddy: The 450 Yearlong History of the Church in Cambodia*, Phnom Penh: CCCC, 2012.
- Seng, S., "Thank God for Catholic Missionary Approach." *Phnom Penh Post*, June 10, 2009.
- Shelton, T. and Cheang, S., "State Commandment: Thou Shall Not Buy Buddhists." *Phnom Penh Post*, July 27, 2007.

- Thyu, J. K., Hoerschelmann, H. and Juergensen, A., "Cambodia." *The Ecumenical Review* 64(2), 2012, pp. 104-124.
- Ui, S., "Unlikely Heroes: The Evolution of Female Leadership in a Cambodian Ethnic Enclave." In *Ethnography Unbound*, edited by M. Burawoy, Berkeley: University of California Press, 1991, pp. 161-180.
- Ui, S., Leng, K. and Aoyama, A., "Building Peace through Participatory Health Training: A Case from Cambodia." *Global Public Health* 2(3), 2007, pp. 281-293.
- Uon, S., "A Cockfight in a Common Nest." *Honeycomb* 4(2), 2003, pp. 10-15.
- Yon, S., "Ex-Khmer Rouge Leader in Cambodia Embraces Christianity," *Anglican Ink*, April 9, 2019.

(本学大学院キリスト教学研究科特任教授)